

平成29年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢北陵高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 あいさつ・礼儀作法・身だしなみ・時間厳守について、職員の共通理解による時宜にかなった指導を行い、規範意識を育む。	① 時間厳守の指導を徹底し、遅刻・欠席者数の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	学年あたり1年間の皆出席者数が A 80人以上であった B 60人以上～80人未満であった C 40人以上～60人未満であった D 40人未満であった	皆出席者数が、 1年 48人 2年 57人 3年 41人 平均 49人 C	皆出席者は全学年で減少し、平均すると前年度より10%程度少なくなった。2学期末から3割程度人数が減ったが、冬季の積雪等によるものと考えられる。次年度も引き続き、体調管理についての指導を続け、健康面において自己管理ができるよう努めていきたい。
		自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	AまたはBと答えた割合が、 生徒 85.9% 保護者 85.8% 教員 48.1%	生徒や保護者の意識と教職員の意識に大きな隔りがある。生徒は挨拶をしていると思っているが、立ち止まってきちんと挨拶ができていない生徒が目立った。登校指導の目的を今一度考え、教職員全体で丁寧なあいさつの励行に取り組む。
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	生徒は頭髪・服装容儀やマナーなどについて A よく守っている B だいたい守っている C あまり守っていない D ほとんど守っていない	AまたはBと答えた割合が、 生徒 90.6% 保護者 93.9% 教員 72.2%	ほとんどの生徒の頭髪や服装などは良好であるが、一部の生徒に違反行為がみられたこと、登下校時の坂道において道路中央まで広がって歩く生徒がいたことから、教職員の数字が低下したものと考えられる。学年と生徒指導の連携のもと、教職員の共通理解を図り、保護者にも理解を求めながら頭髪や服装容儀、マナーの指導にあたりたい。
		③ 生徒を注意深く見守り、面接や保護者との連絡をより密にし、生徒理解を深める。	生徒理解に心がけ、不注意な行動の未然防止に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	AまたはBと答えた教員の割合が、 98.2%
	生徒のいじめ等の早期発見や早期対応に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない		AまたはBと答えた教員の割合が、 92.3%	生徒を注意深く見守り、面接や保護者との連絡をより密にしている。生徒から得た情報を教員間で共有し、観察指導を行っている教員が多数を占めている。保健室に来室した生徒に対しては相談しやすい雰囲気作りを行っている。今後とも教職員間の情報共有をすすめて、連携して早期に対応していきたい。
	学校関係者評価委員会の評価	学校は落ち着いてよくなっているし以前と比較して生徒はおとなしくなった。こちらから挨拶をすれば挨拶を返してくれる。家庭、近所、友人間の挨拶の習慣が大切である。生徒指導（遅刻指導）等については、保護者の意識も多様化しているとともに携帯電話やゲーム等の誘惑も多い。家庭の協力を得ながら粘り強く進めていってほしい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	挨拶は生活の基本であり、立ち止まってきちんと挨拶ができるよう指導を継続したい。また、登校指導の目的を今一度考え、教職員全体で丁寧なあいさつの励行に取り組む。生徒を注意深く見守り面接や保護者との連絡をより密にして、得られた情報を教職員間で共有し、連携をいっそう強化して生徒理解に努めたい。担任をはじめとして生徒や保護者が相談しやすい雰囲気作りを行っていく。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 きめ細かな対応をしながら、生徒の主体的・能動的な学びとなるよう絶えず授業の工夫・改善を図り、基礎学力の定着と学習意欲の向上を図る。	① 研究授業や公開授業を積極的に行い、授業改善に努める。	授業で生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組めなかった	AまたはBと答えた教員の割合が、 79.6%	この調査後に研究授業を行った教職員もおり、実際にはもう少し数字が上がったと思われる。研究授業では、ICT機器を活用した授業が多くみられ工夫が感じられた。引き続き校内研究授業など授業改善を目的とした研修を積極的に行っていく。
	② わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	ICT機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	ICT機器の効果的な活用に努めている教員の割合が、 68.0% C	昨年度の58%から10%上昇し、ICT機器を活用できる教員が増えてきているが、いまだに全く機器を使っていない教職員もいる。生徒の興味・関心を引き出し、授業内容を効果的に伝える方法の研修を実施するとともに、基本的な機器の準備や操作に関する研修も実施したい。
	③ 家庭での学習習慣の定着を図る。	家庭での平均学習時間が A 90分以上である B 60分以上～90分未満である C 45分以上～60分未満である D 45分未満である	試験前の平均学習時間が60分以上である生徒の割合が、 87.3% B	試験前は家庭学習をする生徒が増えてきた。今後は平日もしっかりと学習するよう指導できたらよい。そのためには、早期から進路を意識した学習課題を提供するとともに、多くの資格取得を目指すよう声かけをしたい。毎日1時間程度でできる宿題を出すなど工夫が必要である。
学校関係者評価委員会の評価	ICT機器を活用する教員も徐々に増えているようだ。引き続き授業の研究に取り組み、生徒がわかりやすい授業、参加・活動できる授業を心がけてもらいたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	研究授業では、ICT機器を活用した授業が多くみられ工夫が感じられた。引き続き校内研究授業などで生徒の興味・関心を引き出し、授業内容を効果的に伝える方法等の授業改善を目的とした研修を積極的に行っていくとともに、基本的な機器の準備や操作に関する研修もあわせて実施していく。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 組織的なキャリア教育と面談によりガイダンス機能を充実させ、生徒に自らの能力や適性に気づかせ進路を実現させる。	① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。	担任と生徒との1年間の個人面談回数が A 8回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満	1年間の個人面談回数が、 1年 4.6回 2年 4.4回 3年 5.2回 平均 4.7回 D	個人面談を実施する時間の確保が難しく、昼休み等も利用したが目標とする回数には届かなかった。しかしながら、生徒の課題に応じた個別の面談では、10回以上になった生徒もおり、今後は回数よりも質を重視した指標に変更を検討する。
		進路指導の行事や「産業社会と人間」・「総合的な学習の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	AまたはBと答えた生徒の割合が、 81.9%	80%以上の生徒が役に立ったと答えている。2年次生ではインターンシップ等、様々な活動を通して卒業後の進路を考えられようになった。次年度は、1年次生に各系列で行われている授業の様子を体験させるとともに、3年間の見通しを持った指導を実践したい。学習で身に付けてほしい生徒像をすべての教員で共通理解を進めたい。
		四年制大志望者のうち第1志望校に合格した生徒が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 就職希望者が A 10月末で100%内定を達成 B 11月末で100%内定を達成 C 12月末で100%内定を達成 D 12月末で100%内定に達していない	四年制大志望者のうち第1志望校に合格した生徒の割合が、 80.5% B 就職希望者のうち就職内定者の割合が、 97.0% D	四年制大学の合格者については、おおむね第一志望校に合格できたが、国公立大学への合格者は減少する結果となった。今後は進路指導を充実し、補習授業等の体制を見直していきたい。 就職については、縁故就職を希望する生徒について内定が出ず、学校斡旋の生徒については11月末までには100%を達成していた。こちらも早くから準備をし、生徒が就職したい企業から内定がもらえるよう、資格取得やマナーの向上に努めていきたい。
	② 各種資格・検定試験に取り組む機会を設け挑戦する意欲を喚起する。	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 1000人以上であった B 900人以上～1000人未満であった C 800人以上～900人未満であった D 800人未満であった	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が、 845人 C	漢字検定や英語検定を全員受検としなかったことから目標を下回る結果となったが、技能検定では優秀な成績を収める生徒が増加した。来年度は目標の設定値を再検討するとともに、生徒の資格検定試験の受験者の増加と合格率のアップを目指したい。
	③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	AまたはBと答えた保護者の割合が、 91.9%	保護者の満足度は昨年度（88%）より上昇している。教職員も生徒と進路についてよく話し合っており、また、保護者への連絡もしっかりと行っていた結果と考える。今後とも保護者との連絡を密にし、生徒の進路実現を目指したい。
	学校関係者評価委員会の評価	各種資格検定では合格者が増えており、先生方はいろいろな分野で丁寧な対応をしている。また、北陵の生徒は急な坂道を3年間上っており、気持ちの粘り強さがある。就職希望者が増えているが、資格取得や企業との連携を進め景気に左右されない就職支援体制をつくってもらいたい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	一年次の「産業社会と人間」の内容充実に加え、2年次からの「総合的な学習の時間」を活用したキャリア教育の充実により、生徒が自らの適性を踏まえた進路選択ができるよう指導するとともに、進学・就職のそれぞれにおいて年間のスケジュールを再確認して行きたい。年間を通じた補習授業で生徒の学力の向上につなげるとともに、普段からの指導を通して資格取得やマナーの向上に努めていく。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4 部活動や学校行事、地域貢献活動を通して、生徒の人間関係構築力を育むとともに、信頼される活力ある学校づくりを図る。	① 部活動の活性化を目指し支援・運営する。	部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	部活動加入率が、 1年 85.4% 2年 81.3% 3年 86.0% 全体 84.2% C	部活動の加入率は昨年度（95%）から大きく低下した。特に1年生の途中退部が目立つ結果となった。生徒には部活動内での役割を与えて日々の達成感を持たせるとともに、指導にあたっては工夫が必要であろうと考える。次年度は部活動に取り組む意義をしっかりと説き部活動原則全員加入を目指したい。
		部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上～90%未満である C 70%以上～80%未満である D 70%未満である	部活動に満足感・達成感を感じている生徒の割合が、 69.2% D	満足度・達成感は昨年度（68%）と同等の数値である。生徒は前向きに取り組んでいるが、対外試合などで思うような結果が出ていないことが原因の一つと思われる。試合等の結果だけではなく日々の活動で生徒同士が切磋琢磨し満足感や達成感が得られるよう指導について工夫していきたい。
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	地域の清掃活動や行事、ボランティア等に休日も含めて年1回以上参加した生徒が A 500人以上であった B 450人以上～500人未満であった C 400人以上～450人未満であった D 400人未満であった （「北陵アバンテ」を除く）	地域の清掃活動や行事、ボランティア等に休日も含めて年1回以上参加した生徒が、 168人 D	全学年600人規模の本校にとって目標の設定が高すぎた感がある。生徒は各方面で活躍していたがボランティアとしての自覚がなく、参加していないと記入した生徒もいたと思われる。今後は「北陵アバンテ」をきっかけとしてより多くの生徒が地域の活動に参加するよう働き掛けたい。
		③ 信頼される学校づくりに努める。	本校での学校生活に満足していると回答する割合が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	生徒が学校生活に満足していると回答する保護者の割合が、 87.7% B
	本校の特色や生徒の活動が、ホームページなどで積極的に発信しているとする教員の割合が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満		本校の特色や生徒の活動を積極的に発信しているとする教員の割合が、 98.1% A	本校では、各教員がホームページなどを利用し、学校行事や部活動等、外部への発信を積極的に行っている。今後も情報発信を継続し本校の特色や生徒の活動を広く周知していきたい。
	学校関係者評価委員会の評価	部活動の加入率はまずまずだが生徒の満足度があまり高くない。対外試合においてチームメイトの応援をしない生徒も見かける。最近の傾向かもしれないがうまく指導してほしい。また、「北陵アバンテ」もボランティア実績に加えることで、自分も参加しているという自覚が生まれボランティア参加につながっていくのではないかな。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	部顧問は、生徒の活動の様子をよりしっかりと把握していかなければならない。生徒同士が協力し合い切磋琢磨できる環境の整備と活動内容の工夫により生徒の満足感や充実感を持てるようにしたい。ボランティア活動については、まず生徒自身がボランティアに参加する機会を持ち経験させることで、生徒が自発的に参加しやすい状況をつくっていききたい。			